

Contents

- ・会長挨拶
- ・学会報告
- ・Transmitter(essay)
温故知新
前程万里
- ・新評議員自己紹介
- ・事務局から
- ・編集後記

JSVN Letter

Volume 1
October 1, 2018

会長挨拶

発刊に寄せて

獣医神経病学会会長 宇塚雄次(岩手大学)

会員の皆さま、こんにちは。今年度より会長を仰せつかりました宇塚雄次です。私は山口大学での臨床脳波の研究を始めたことをきっかけに、今の脳神経科担当の診療外来を行うようになりました。

今回、学会のニュースレターを発行する運びとなりました。というのも、現状では神経病学会として掲載論文も無いことから、会誌や会報といった類いのものが一切ありません。そこで、少しでも会員相互の情報交換の場にできれば、と考えてこのニュースレターを企画しました。学会の開催案内や、役員の自己紹介、名誉会員や若手学会員のコラムを掲載したいと考えております。今後は皆さまのところにも原稿依頼が行くかもしれません。是非その際には、学会に対する皆さまの熱い思いを綴っていただくようお願いする次第です。そして、少しでも日本の獣医神経病の臨床レベルが上がるようお互いに頑張っていきましょう。



学会報告

2018年度 神経病学会(盛岡大会)を終えて

大会長 岩手大学 宇塚 雄次

去る6月30日と7月1日にかけてサンセール盛岡において今年度の神経病学会が開催されました。大会参加者は、地方大会のせい、いつもよりは若干少なく140名程度でした。昨年の続編である國頭先生の「私家版コミュニケーションスキル」は今年も感動に包まれるような内容でした。一般演題も例年同様10題が発表され、活発な討論が行われました。学会と並行して行われた基礎講習ですが、今回より二巡目に入ったこともあり、気持ち出席者が少なかったように思われましたが、これも参加者自体の総数が少なかったことも響いているものと思われます。参加者の多くの方(90名)は一日目の大会終了後の懇親会にもご参加いただきました。懇親会では盛岡のお祭りのさんさ踊りの披露や盛岡名物のワンコそば早食い大会を行い、皆様に楽しんでいただきました。早食い大会で優勝したJARMEC選抜の選手の皆さまおめでとうございます。今回は東北の各地区の獣医師会様よりご後援をいただきました。ここに紙面を借りてお礼申し上げます。今回の大会がご参加いただいた皆さまにとって有意義で、記憶に残る大会となりましたことを祈念してご報告いたします。



「獣医神経病学会の進化について」

温故知新

徳力幹彦 山口大学名誉教授
日本動物リハビリテーション学会会長
獣医神経病学会名誉会員
日本ウマ科学会名誉会員
米国神経科学会名誉会員

私は50歳まで神経生理学に集中していたので、医学関係の学会でしか研究発表はしていなかった。しかし、1990年にスウェーデンで開催された「国際ウマ運動生理学学会 (International Conference of Equine Exercise Physiology)」に呼ばれて講演をした3年後にこの学会の理事に選ばれ、その直後に「世界ウマ獣医学会 (World Equine Veterinary Association)」の理事にも選ばれ、獣医学の方に戻ってくることを決意した。

1993年、臨床教授達から獣医神経病学会の初代会長を依頼され、臨床家ではないのに「獣医神経病研究会」の会長を引き受けることになった。最初は弱々しい学会であったが、私が会長を辞めるころにはCTやMRIなどの導入により神経疾患の診断技術が急激に進化し、「獣医神経病学会」と名称変更後は会員も増えてきて、現在は活発な学会に進化している。

30年以上前、私が米国のNIHの国立神経疾患・脳卒中研究所にいた時、米国の「神経科学会 (Society for Neuroscience)」に入会したが、会員数は4千名前後であった。しかし、現在は会員数が4万名前後、研究発表数は1万6千と巨大化している。これは、米国の医学系の学会が全て国際学会化したためでもあるが、神経科学に対する世界的な関心の高さも影響している。

私は、現在、「獣医神経病学会」と「米国神経科学会」の名誉会員であるが、前者は会費を払う必要がなくなっただけ、後者は毎年の学会のシンポジウムなどの案や講演者の推薦など、恐ろしく多忙である。そこで強く感じるのは、これから分子生物学が神経疾患の診断・治療に入ってくること、そして急激な進化が起こるのではという予測、そして「獣医神経病学会」がさらなる進化をするであろうという期待である。

Transmitter 第1回

前程万里 「最後の楽園での資格取得」

穴澤哲也 日本動物高度医療センター名古屋

ガラパゴス諸島は南米エクアドルの西に浮かぶ100を超える島々からなり、ダーウィンが進化論のヒントを得た地として有名だ。日本からはアメリカ経由で飛行機を乗り継ぎ24時間以上かかるため長期休暇でないと行くのは難しい。私は4年前の南米旅行の際、9日間をガラパゴス諸島で過ごした。生態系維持のため手荷物検査は厳重で、消毒槽や種子を落とすためのマットが空港には設置されている(手荷物検査が終了したら質の悪いビニールテープでグルグル巻きにされベトベトになるのでお気に入りのトランクは要注意)。島内はアシカやイグアナが日陰やベンチを占拠し、ゲンカンドリやペリカンが頭上を飛来する、まさに動物たちの楽園だ。エクアドル本土とは違い治安は良く、夜道を歩いても危険を感じることは無かった。

個人で散策できる範囲は限られており、基本的にはナチュラリスト・ガイドと共にツアーに同行しなくてはならない。ナチュラリスト・ガイドは動植物だけでなく溶岩や島の成り立ち、海流、天候、実に様々な知識を備え、なんでも質問に答えてくれる。観光客のガイドの他にも動物の監視や報告といった島のモニタリングの役割も担っており、知識や能力によりグレードが1から3まで分かれている。

ナチュラリスト・ガイドグレード3になるために必要な条件は非常に厳しく、①エクアドル国籍、②大学または大学院で地理学、生物学、海洋学などを専攻、③三カ国語以上話せる、となっている。日本人のナチュラリスト・ガイドはいないとのことなので非常に興味があったが、①なんとなかなる②日本の獣医師免許でいけるかな? ③...絶望的。もし語学が堪能な方がいたらガラパゴス諸島でのナチュラリスト・ガイド資格取得を挑戦してみてはいかがでしょうか?



新評議員あいさつ 第1回

東京大学大学院 獣医病理学研究室 チェンバーズ ジェームズ

獣医神経病学会の評議員に加わりましたチェンバーズです。麻布大学を卒業後、2011年から東京大学病理学研究室内の助教に着任しました。神経変性疾患や脳腫瘍の病理を研究しながら、臨床検体の病理検査も行なっています。日本語が喋れないのではと警戒されることが多いですが、実は宇都宮育ちで、ある程度は日本語が分かりますので、病理に関することは気軽に相談いただければと思います。趣味は魚釣りと音楽で、最近はあまり活動できていません。家ではネコを2頭飼っておりますが、今年の春に1頭が腎不全で死んでしまいました。病理解剖をしたところ、残念ながら脳の病変はありませんでした。神経を専門にされている臨床の先生方は、積極的に病理解剖を依頼して下さるので、動物の神経疾患の病態を明らかにできるよう尽力したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



写真説明: 今年死亡した飼い猫のウリボウ。いつも機嫌が悪そうでしたが、脳の病変はありませんでした。

事務局から

日本獣医生命科学大学 長谷川

基礎講習プログラムに関するお知らせ

2015年度より、「神経病初学者への教育」「獣医神経病学会の底上げ」を目的として開始しました基礎講習プログラムですが、昨年(2017年)の冬の講習会で全20回のプログラムが一通り終了しました。そして10名の先生が全プログラムを受講し、今年の盛岡大会



受講修了証授与式

写真左から坂大先生、会長、大塚先生

にて修了証(盾)が授与されました(加えて、基礎講習修了者は学会ホームページに掲載されます)。

また今年から改めてプログラム1より講習会が始まっております。これまで基礎講習会は夏の本大会内での講習会と冬の講習会(東京)と年2回開催して参りましたが、受講者の中には本大会の時のみ、あるいは冬の東京の時のみ出席という方が少なからずおります。講習会は偶数ですので、このまま繰り返していくと本大会の時はこのプログラム、冬はこのプログラムと固定化されてしまい、どちらかにしか出席できない受講者はプログラムを完了するのが難しくなると考えられました。このため、本年度は冬の講習会をお休みし、内容と場所をずらすことが先日の総会で決定されました。つきましては次回の基礎講習会(プログラム4~7: 神経学的検査)は2019年6月29・30日の東京大会になりますので、ご周知のほどよろしくお願い致します。

獣医神経病学会基礎講習修了者(2017年12月3日付)

海老沢緑(岐阜大附属動物病院神経科); 大内詠子; 大塚茂樹(ノヤ動物病院); 斉藤哲次; 小路祐樹(山陽動物医療センター); 坂大智洋(新潟動物画像診断センター); 樋笠正晃(セントラルシティ動物病院); 町田晴市(町田動物病院); 望月啓太; 矢田奈緒子(敬称略)

編集後記

執筆を快くご承諾いただき、また素晴らしい文章を送ってくださった先生方へ厚く御礼申し上げます。これから回を重ねるごとにいいものをお届けしたいと思っておりますので、会員の皆様方におかれましては忌憚のないご意見をいただければ幸いです。宜しくお願い致します。

編集長: 宇塚雄次

編集委員: 宇津木真一 小澤剛 チェンバーズ・ジェームス 和田昌絵

ご意見窓口: 小澤(ozvet@k9.dion.ne.jp)